



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第二十八号〜

立春 りっしゅん

二月四日



春の数え方

立春とは、名ばかりの寒さ。でも、木々の枝先にはしっかりと芽がついています。少し穏やかな天気になると、わが庭先の木蓮を眺めながら、花のつぼみがふくらむのを今か、今かと待ちわびるようになります。

春先の気候は目まぐるしく変わりますが、毎年決まって、花は咲き、虫は姿を現します。異常気象や地球温暖化といわれながらも、生き物はやはり春になると活動を始めます。当たり前のように思うのですが、理学博士の日高敏隆さんは著書『春の数え方』に生き物たちがどのようにして春の到来を知るのかを書かれました。

小鳥は、一日のうちの昼の長さで季節を知ります。年によって温暖は変わりますが、日の長さは変わりませんから、小鳥は毎年同じように春の到来を知ります。

一方、ほとんどの虫たちは、暖かき、温度で春を数えているといふのです。一定の体温を保つことの出来る恒温(定温)動物の小鳥とは違い、変温の昆虫は気温に左右されます。そのため、虫たちは昔から、温度の積算をしていることが知られています。春先の気候は三寒四温といわれるように、三日寒さが続いた後には四日ほど温かくなり、また寒さが戻りと、寒暖を繰り返すのが特徴です。揺れ動く気温に毎日反応するのではなく、一定以上の温度(発育限界温度)だけを数え、それを積算していくと、虫が卵から孵つたり、幼虫がサナギになったりするのです。その温度などの一定値はそれぞれの種類によって異なるといえます。三寒四温を感じながら、春を知る生き物たち、生きとし生けるものは尊いと思わずにはいられない春先です。

文 千種清美